

今度は日本から

九州大学生体防御医学研究所炎症制御学分野
池田史代

長すぎる大陸ヨーロッパでの研究期間を終えて、やっと日本に戻ってくることができたのが、2019年12月。約15年ぶりの日本生活です。九州大学生体防御医学研究所に炎症制御学分野を立ち上げてから1年と少しになりました。私のことを知ってくださっている先生方は少ないと思われるので、自己紹介を中心に綴らせてください。

私は大阪を故郷とし、大阪大学歯学部を卒業しました。人と関わることや、ヒトの体に興味があり進学した故、歯科医師免許も一応取得しましたし、また在学中には臨床経験もある程度持つ機会がありました。しかし、基礎配属実習での数か月の研究室配属の間に、基礎実験に異常に大きな興味を持ったことが、その後の自分の進む道を決めることになりました。教育プログラムの設定上、ピペットマンをほとんど持ったことすらないまま博士課程に進んだ（生化学 米田俊之ラボ）のですが、どうにか破骨細胞の分化に必須の転写因子を決定するという研究にて博士号取得に至りました。指導教官の方々には大きく感謝です。

こだわりが強い割にはあまり心配せず、やりたいことに向かってただ進めばよいと思う性格だからか、とにかく研究が楽しく、それが無い将来を想像することはありませんでした。実力不足で路が閉ざされる可能性については気に留めておりましたが、早く独立して、自分の思う重要な問題を自分の責任で解決したいという気持ちは学生のころから強くもっていました。博士課程修了後、ユビキチンとオートファジーの専門家 Ivan Dikic のラボ（フランクフルトのゲート大学医学部）にて、これまでの自分の経験を活かし、炎症反応シグナルについての研究テーマを中心にボ

スドク時代を過ごしました。この間の研究は、現在の池田ラボの方向性に大きく寄与しています。7年弱もおりましたので、ラボの中でどんどんシニアになっていき、研究とは直接関係のない責任ある業務も任されました。ボスの2か所目（クロアチア）、3か所目（フランクフルトの別キャンパス）のラボの立ち上げを含め、誰もやりたがらなかった（直接CVに載せられない業務だから？）これらの経験も、今思えば大変よいトレーニングになったと思います。思い出してみれば、ボスのメインラボの近隣の建物への引っ越しが、さらに二度あったのですが、これも、その後の自分のラボの予行演習的なものになりました。

実は、日本の外に長くいたいという希望は微塵も持っておらず、日本でも最初の独立ポジションを求めて就活をしたのですが、一ラウンド目は全く実りませんでした。それなら、「その他」の条件は無視して、自分が望む研究環境のみに焦点を絞っての就活にしようということにし、最終的にIMBA（ウィーン、オーストリア）にジュニアグループリーダーというPIのポジションを得ることができました。こちらでは、研究面での自分が望んだ点は全てカバーされ、とても良い環境で8年間、炎症、ユビキチンとオートファジーをキーワードとした研究を進めることができました。知らぬ土地でオーストリア語（ドイツ語とは相当違うという驚きがあったので、あえて！）もわからず、知っている人もいない中、0からのラボの立ち上げも生活のセットアップも大変でしたが、「最近のラボ再立ち上げ」より8歳も若かったため、なんとか乗り切れた感があります。一度目のラボの立ち上げの間は悪夢で頻繁にうなされ、げっそりやせてしまうほど大変だったので、もう二度とご免、という気持ちが大きいのですが、PIとしての8年間の経験から本当に多くを学びました。一番よかったのは、ブラックシープでありながら、こつこつと、ひとつずつきちんと仕事をしてきたことにより、特にEU圏での研究領域内の多くの研究者から信頼を得られたという実感を持てたことでしょうか。また、出身も文化圏もコミュニケーションのちょっとした習慣も全く違うような修士や博士学生が、池田ラボから無事に論文を引っ提げて卒業したり、多くのラボで経験をもつTAさんたちにお褒めの言葉をいただいたりすると、本当は実験が一番好きな私でも、それはそれで大きな充実感があります。

ヨーロッパの多くの若手PIポジションは任期付きです。アメリカの assistant professor ポジションならテニユアトラックといったところなのでしょうが、ヨーロッパの研究

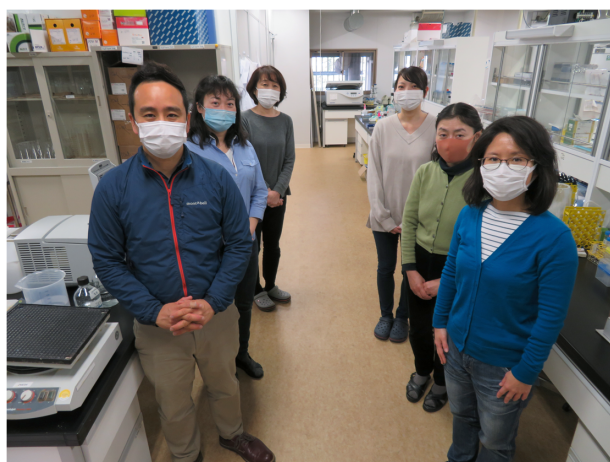


写真 生医研の池田ラボの現メンバー

所では契約期間後は雇用打ち切りという場合がよくあります。私の場合も二度目の契約期間後は打ち切りという契約書だったこともあり、次のポジションのための就活は、契約の切れる3年前から始めました。次は日本でポジションを獲得するんだと伝えと、日本に住んだこともない人達から、「無理じゃない、日本は、女性だしコネないでしょ。」なんてよく言われたものです。そんな中、また、これまで縁もゆかりもなかった場所で研究室を主宰する機会をいただくことができました。IMBAでもそうだったと思いますが、よく知らない人を雇うということについて、生体防御医学研究所の先生方も大変な勇気をお持ちで、ありがたい限りです。九大への引越すと、ラボの再立ち上げは、ヨーロッパから日本へということで距離は大きかったのですが、予想よりずいぶんスムーズで、あの悪夢がもう一度ということにならず、とても感謝しています。経験を積んだ（面の皮が厚くなった）こともあるからでしょう。次は九大生医研でおもしろい発見をして、日本から世界へ

発信していきます。

考えてみれば特に秀でた研究能力があるわけでもない私としては、相手や研究標的と自分の状況を十分に見極めて、存分に計画した上で、適宜、うまくアプローチしてどうにかする、というのが、これまで20年の研究生活から確認した基本のスタイルとなりました。当たり前すぎて、どうということもありません。よくこれまでやってこられたものです。

変な人が日本に帰ってきたと思わずに、辛抱強く付き合っていていただければ幸いです。これまで20年やってきて、これから定年まで20年、まさに道半ばです。九大生医研の池田チームとして、あとどれだけの新しい発見ができるのか、どんな新しいコラボができるかなど、楽しく思いを馳せながら、日々研究を進めております。随時ラボメンバーもリクルートしております。どうぞよろしく願いいたします。